

勝林寺寺報

「まね」のすすめ

いまの学校では、何ごとにおいても自主性の尊重をやがましくいます。他人のまねをしないで、自分の思い、考え方大切にせよと教えます。しかし私は思います。もちろん、自分の考え方も尊重されるべきですが、ことに幼い子供については、何よりも「まね」をさせることが大切だと思います。教育というものは、基本的にまねから始まるものです。学ぶとは「まねぶ」からきた言葉です。学習の習も、同じことをくりかえして身につけることで、学ぶと同じ意味です。子どもが大人にしたがい、生徒が先生にしたがって、そのまねをする。それが学ぶというこの原意であり、教育ということも、それが原点であると思います。

そのことは昔の教育によく見られます。たとえば大工職を育てるについては、その理論についても、技術についても直接に説明し、指導するということはいたしませんでした。すべて師匠にしたがつて、いつしょに現場の仕事をしながら、師匠のまねをし、その腕を習うということにおいて、一人前に成長していくわけになります。そのようなやりかたは、昔の学習については、共通する方法でありました。

しかししながら、このような学習方法の場合には、何よりもよい手本が必要であります。すなわち、師を選ぶということ、いかなる師にしたがうかということが問題になります。

その点、今日のような大衆化した教育状況においては、むつかしい問題であります。教育において、良い手本、良い師が大切であるということは、いつの時代においても、共通して重要なことであると思います。

ことに幼い子どもに対する「しつけ」教育については、いつもそのことが問われてまいります。今日では、子どもの教育とか学習といわれる場合には、いつも知的な訓練や、向上だけが考えられます。私は、それにもまして、「し

つけ」教育、心の教育をこそ重視るべきであると考えます。そしてその場合、親が子どもの師となり、手本となるということは、もつとも大切なことであります。昔から子どもは親の後姿を見て育つと申します。親の生き方が、そのまま子どもの人生に投影されます。子どもが人間として、充分に成熟した人に育つてほしいと願うならば、両親はそれにもまして、自分自身が成熟した人間にならなければなりません。親が子どもを媒介として育てられてこそ、子供はその親において育てられ、成長していくものであります。親がその過程において、いいかげんな生活を営んでいる限り、子どものまことの成長は期待できません。子どもの教育については、家庭こそが何より重要であります。

宗教教育においても同じであります。過程において、毎朝かかさず仏壇にお仏飯をお供えし、家人の人たちがそろつて礼拝する習質があるならば、そういう家庭に育った子どもたちは、将来きっとと仏さまを拝むようになりましょう。これから時代、物質文明はいよいよ進歩して、私たちは生活は向上するでしょうが、その反面に、人間の心の悩みはいつそう増大する事であります。そのためにも、子どもに対する心の教育、宗教教育はことに大切だと思います。

(信楽峻麿遺稿法語集より引用)



敬老報恩講



十月 勝林寺 予定

一日(木)	濱美知代宅	一周忌
三日(土)	関森敏昭宅	三回忌
川見祐枝宅	一周忌	
七日(水)	坂本克美宅	七回忌
八日(木)	敬老報恩講	役員余興練習
一〇日(土)	平野睦美宅	三・七回忌
一三日(火)	出石組	三役会

年に一度、人生の大先輩の皆さんを本堂に招待する敬老報恩講を、今年も開催いたします。共にお念仏し、テーブルを囲んで食事を共にし、舞台で繰り広げられる出し物と一緒に楽しみましょう。精いっぱいのおもてなしを用意してお待ちしております。

(仏事仏婦会長より)

日時 一〇月二十四日(土)
午前十一時より

一五日(木) 敬老報恩講 役員余興練習
一七日(土) 敬老報恩講 役員余興練習

二一日(水) 敬老報恩講 舞台準備
二三日(木) 龍谷大学真宗学 同窓会

* 仏婦評議員さんに参加のとりまとめをしていただきます。
* 送迎バスを差し向けています。案内状に記載の場所以外に希望される場所がありましたら、寺までお知らせください。

ご報告

九月二十三日のお彼岸会は、好天に恵まれ、たくさんの方にお参りいただきました。本堂によい香りが漂い、正信偈のお勤めとお念仏の声が響き渡りました。法要が始まる前や終わってからは、あちらこちらで、久しぶりにお会いする方々とのおしゃべりに花が咲き、本堂が生き生きと輝く一日となりました。ありがとうございました。

一四日(土) 敬老報恩講
長專寺 報恩講

二六日(月) みのりを聞く会

「」案内しておりました神戸別院二十周年年記念事業「如月の華」観劇ツアーに、お申し込みをいただきありがとうございました。勝林寺から、お申込みいただいた皆様と住職・坊守ありがとうございました。

二八日(水) 総代会 但馬ブロッサ研修会
二九日(木) 平野さかえ 三回忌
三一日(土) 湯口博文宅 七回忌

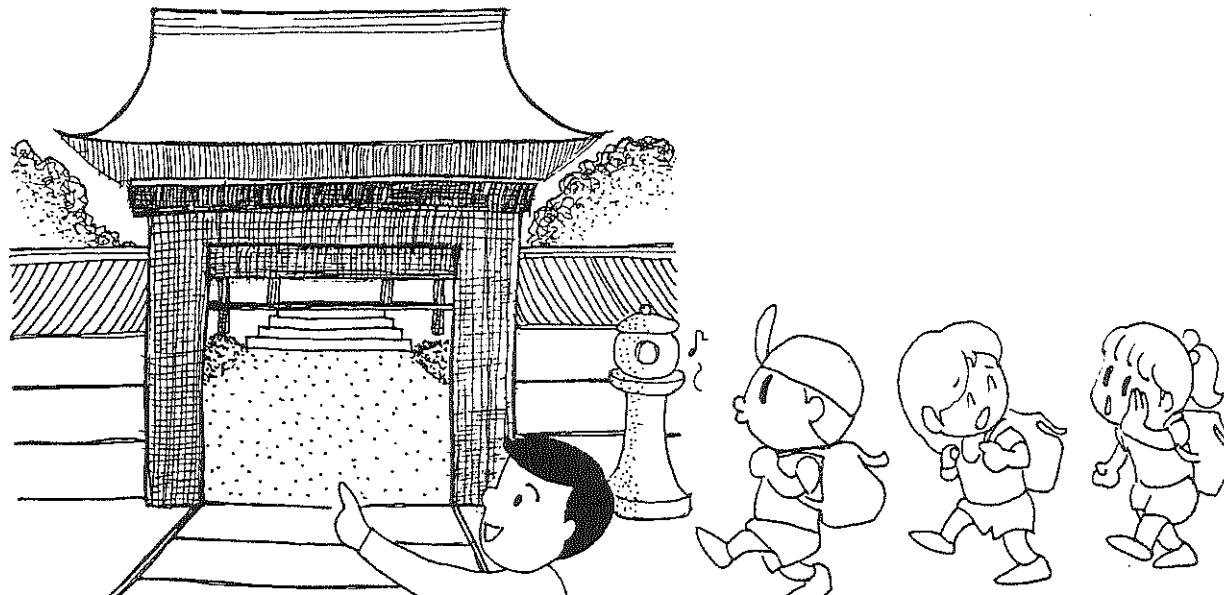
高福寺 報恩講

私たちが、仏教のさとりの岸（彼岸）に到達するには、経なければならぬ六つの課題がある。それを六波羅蜜（ろっぽらみつ）といいます。その一つが「布施」です。

「お話を聞いて、申します間にかかる金を度十二
布施とは、インドの言葉で「ダーナ」とい、
相手に対して利になることを「施す」というこ
とです。ほかの五つは、「持戒」・「忍辱」・「精進」・
「禅定」・「智慧」です。今回は、「布施」につい
てお話しします。

「布施」と聞くと、神社仏閣にお金を渡すことだけのイメージが強いですが、それだけではありません。布施は、一般的に四摂法（しそうほう）^{*}（うぼう＊菩薩が、衆生を悟らせるための四つの方法）の一つに分類されています。「布施摂法」と言われ、心や物でのおもてなしを言います。ほかにも「愛語摂法」で、やさしい言葉のおもてなし。「利行摂法」で相手のためになる行為でのおもてなし。「同事摂法」で、相手と同じ立場に立つての平等に接するおもてなしなどがあります。

最後は、これらの「布施」を行ふにあたって、自戒、警戒しなければならないことを紹介します。それは、「三輪清浄（さんりんしょうじょう）」といわれていることです。それは、能施（施す人）、所施（受け取る人）、施物（施すもの）に、執着（こだわり・名利心）があつてはならないということです。たとえば、「私が、あの人に、これこれのことをしてあげた」（どうだ、えらいでしょ）とおもうことです。このようないやしい心根がまとわりついてしまえば、「布施」ではなくなつてしまふのです。これでは台無しです。台無しどころか、卑しい「煩惱」に転落してしまふのです。



蓮如上人という方は、「この心根をズバリ「うりこころ」（自己宣伝のこころ）といわれ、「まいらせこころ」（してあげたこころ・高慢心）と指摘されました。この心根の最後には、「これこれをあげたノニ」と、おもてなし、サービスどころか、相手を憎悪し排斥する「貪欲（とんよく）・瞋恚（しんに）・愚痴（ぐち）」といわれる三毒の煩惱になってしまいます。地獄・餓鬼・畜生に自らを落としていく結果を招いてしまうことは、世の中によくあることではあります。せんか。他人事ではなく、私自身反省しなければなりません。

世俗の論理の行き詰ること

教えるのが仙達

なつたんじや何かと大変だらうから」と家を出て一人で借家住まいを始めましたが、年老いての仕事も次第になくなり生活は日増しに窮していく様子でした。愚痴や人の悪口は野暮だといったFさんの潔い姿勢はどこか危うさが漂つて見え、同朋会の誰もが密かにFさんのことを気にかけていました。大家さんの都合で二軒目の借家へ移った頃からでしょうか、Fさんはどんどん身体が弱り、塞ぎ込むことが多くなりました。寺へ来るのも辛くなつたようで、代わりに私がFさんの元へ時々訪ねていくようになります。そして、亡くなる二日前のこと。一緒にアイスクリームを食べていると、ふいにFさんが泣き顔のような笑みを浮かべて「坊守さん、もうな、なんもかんもな、あづけててしまいどうなつた」と言されました。世俗の論理の行き詰まる事態を身をもつて生きてきたFさんの、あべそのをかいているような笑顔を思い出すたびに、あの方の浄土を求める心が半端でなかつたことを考えずにはおれません。私がFさんから最後に聞いた「もう、なんもかんも、あづけとうなつた」は今、「なむあみだぶつ」と聞こえてくるのです。(田中具美枝 愛媛 福圓寺坊守)

住職と共に福圓寺をおあずかりして二十年近い歳月が過ぎました。(中略)住職は寺に入つてすぐによく同朋会を始めました。福圓寺では、月に一度の集まりははじめてだつたそうで、最初は三四人の門徒さんが遠慮がちに参加していたのが、やがて七人、八人と増え、五年も過ぎた頃にはずいぶん賑やかな会になりました。(中略)同朋会の皆さんにはさまざまな苦労や悩みを背負つておられました。息子さんを亡くされてはじめてお寺へ来るようになつたFさんもその一人で、家族のために子どもの頃から料理屋に住み込んで働いてきたという苦労人でしたが、なんとも陽気なことが好きな人で、大勢人が集まるごとに必ず場を盛り上げようと賑わいを演じて人を笑わせるのでした。まだ五十歳前だった息子さんが亡くなつて少し経つた頃、「嫁さんも私が世話を

どすく